



長谷寺かわら版

# 百日紅

96号

2017 (平成 29) 年  
1月1日

## 涅槃圖の入院

ねはんず

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。今年もよろしく願います。

恒例の鳴門結衆の行事、

今年も涅槃会の当番がまわってきました。去年の当番は七月の布薩会でした。ご存知でしたか？ 年

頭にお配りしている「鳴門結衆法会表」、せめて長谷寺で行われる行事くらいはチェックしてみてください。年忌のご先祖さん以外の情報も盛りだくさんです。

もちろん、行事にもぜひご参加下さい。他所の地域ではもう見られない、珍しい行事も体験できます。

☆干支がひとめぐり

さて、涅槃会。前回は2005年でした。早いもので、あれから干支がひとまわりしたわけです。

前回は、プレ・イベントと称して、本堂で影絵を見ました。ご記憶にある方もおられますね。

記念事業では、いくつかの細々とした工事をしました。最も大きなものは、旧庫裏の廊下の張り替えです。張り替え自体は法要に先んじて'02年に行いましたが、この7年後の'09年には庫裏を改築することになります。いま思えば、ひどくもったいないことをしまし

たが、当時は庫裏の全面改築など、全く念頭にありませんでした。

個人史的には、天命を知って（50歳になって）という意味です。間もない春。この法要を終えてすぐ、書を習い始めたのが、ささやかな事件でした。お習字教室なんて、小学生以来のことです。

たくさんの方々を集めて、賑やかに終わった涅槃会を振り返って、せめて境内に建てる大卒塔婆

婆くらいは、人さまに頼らず、住職自身の手で書くべきではなかったろうかと反省したからです。もともとまだ、住職ではありませんでした。だから「50の手習い」のきっかけになった法

要でもあります。

師匠は、その大卒塔婆を書いてくれた宝珠寺の信裕和尚。指導者は超一流なのですが、悲しいことに私は書の才能にも恵まれていないみたいです。少しも上手くなつたような気がしないのですが、その書の稽古も、始めてまる12年。うちの涅槃会の大卒塔婆の初めての染筆です。

住職という立場を襲った

のが翌'06年ですから、住職としても初めての涅槃会ということになります。

☆いまはのきわ

さて涅槃会。難しい名前ですが、釈迦の祥月命日の法事のことです。お釈迦さんの命日の供養は、ご先祖さんたちの年忌の法要と違い、毎年やることになっていきます。年忌だったら2500回忌くらいでしょうか。これだけ古いと御遠忌などと呼



んだりします。

法要では、涅槃図と呼ばれる釈迦の臨終のシーンを描いた図を本尊として、本堂正面に掲げるといのがならわしです。涅槃会だから涅槃図を掲げて拜む。当然のことに思えますが、亡くなる時のシーンを、祥月命日の法事の正面に掲げるなんて、考えてみればちよつと不気味ですよ。



通常の表装は、作品の周囲を布(裂)で囲む「裂表装」ですが、これは表装の布の模様に見える部分も、同じ下地の絹に描かれた絵で、軸全体が一枚の絵なんです。「描き表装」という、とても珍しい技法です。

ご自身の親御さんの法事を想像してみてください。ベッドのそばで、亡くなったばかりの遺体を囲んで家族や親戚が悲しんでいる。そのスナップ写真を大きく延ばして、法事の祭壇に安置し、それを拜むようなものです。

むろん仏教の法要ですから、釈迦(を含めた仏菩薩たち)を本尊にする以外には考えられません。檀家さんの年忌の法事でも、祭壇に仏菩薩たちを本尊として掲げます。ですから、釈迦の命日の供養の本尊が釈迦というあり方もまあ、そうせざるを得ないのは分かります。空海の命日の供養も、御影供という名前の通り、「御影」(いまならさしずめポトレイト)肖像写真です)を掲げて供養するわけですから。でも、

空海の御影は、いまわのきわのシーンではありません。涅槃会も、涅槃図はせめて釈迦像の傍らに添えるだけにするとか、できないもなかと思えます。

むろん涅槃会は、釈迦の遺徳を偲び、感謝を捧げる法要ですから、涅槃図は釈迦がどんなに慕われ敬われていたかを、偲ぶよすがにはなりません。しかも、そこに描かれているのは、たしかに釈迦の死という、いとも悲劇的な場面ではありませんが、大画面に多くの弟子たちや動物たちが勢ぞろいし、森や川、月や雲などを配し、全体に華麗な彩色を施したもので、法要の本尊として少しも不自然なものではありません。

### ☆五〇〇歳

ここでようやく、長谷寺の涅槃図の話になります。

昨春、観音堂で本尊の十一面観音さんの両脇にお

立ちの、四天王像の調査を依頼しました。長谷寺におわす数ある仏像の中でも、とくに傷みが激しいので、この際修復すべきか、それだけの価値のあるものなのか。もし修復するとしたらどれくらいの間と経費がかかるものかを、見極めてもらうためでした。

調べてくれたのは、奈良にある元興寺文化財研究所のスタッフたち。ここは、民間の文化財研究所の草分け的存在で、かつて、「十二天」の仏画を修復してもあったこともあります。その四天王像の調査が一段落して、他に拝見できるものはありませんかと尋ねられました。そういうことならと、今回の行事に使う涅槃図を押し入れから出してきました。文化財専門のスタッフが、ひと目見て、15世紀後半のものと鑑定しました。

「ある所には、あるもん

ですなえ」と、感慨深げに仰る。「由緒ある寺には、歴史的価値を有する物があるものだ」といった意味でしょう。どうやら長谷寺は、そういう物があっても不思議ではない寺みたいです。

ところで、15世紀後半といえ、長谷寺の創建と同じ時期です。その専門家氏の鑑定によると、うちの本尊の十一面観音像は、鎌倉時代の作らしく、それが本当ならば、寺の歴史よりもずっと古い、まさに寺宝の名に値するものですが、涅槃図はそれに次ぐ寺宝といえます。

ただ、なにしろ500年も昔のもので、しかもひどく傷んでいきます。できるだけ早く補修することを、強く勧められました。

涅槃会を前に、法要の本尊の涅槃図の正体がわかるなんて、偶然にしては出来過ぎています。横たわっているお釈迦さんに、「そ

そろ何とかしてほしいのだがね」と、言われたような気がしました。

というわけで、当初の補修対象候補だった四天王さんたちにはいましばらくお待ちいただくことにして、まずは涅槃図の補修から手掛けることにして、これを今回の涅槃会の記念事業とすることにしました。

これまでうちでは、少な



釈迦の涅槃に際し、沙羅双樹が悲しみの色の花を咲かせたというのが、經典の説くところですが、この図では花を付けていません。

命日は二月十五日。釈迦たちを見守るように、十五夜の月が輝いています。

くともここ数十年は、本堂や庫裏など、建物の手入ればかりに目を奪われて、肝心の仏さんたちをずっと蔑ろにしてきました。しかし仏像や仏画も、代々の住職たちが手当てをしなから、長く護り伝えてきたものです。そういう仕事

が、また巡ってきたわけです。

### ☆所見

その涅槃図に関する所見が、文化財研究所から届きました。専門用語が散りばめられていますから、ちよつと読みにくいかも知れませんが、一部割愛の上、ほぼ原文のまま掲載します。参考までに。

#### 長谷寺所蔵涅槃図の所見

I 横方向には幅一尺を超える絹を四副連ね、縦には六尺余りの大画面とするもので、絹地は当時中国からの輸入品であり、岩絵具(顔料)を賦彩している。

絹本仕立てといい、顔料の着色といい、伝統的かつ本格

的な材料・技法を用いたものである。

II 画面の上下・左右には、通例の表具裂を用いず、古式に則つて画絹に牡丹・唐草の文様を表具裂部分に描く「描き表装」といわれるものである。その費用も裂仕立てよりも嵩むもので、「描き表装」の事例は裂表装のものに比べ少ない。

風帯は付けない。材料同様に伝統的な表装形式をもちいている。

III 涅槃図の図像形式としては、通例のものから大きく外れたものではないが、細部では本図にいくつの特徴的な図容を指摘することができ、各部の描法などから絵師の技量や本図の制作年代なども推し量かることができるので、以下に列記したい。

#### (略)

IV 以上のような諸観点から、結論的に本図制作年代については、江戸時代に多作された紙本の定形化した涅槃図よりも一段古様とみられるもので、戦国時代末から江戸時

代のごく初期、未だ中世的な感覚の残存が濃厚な時期として、およそ寛永年間を降らなところのものかとみられ、「描き表装」絵画の文化財としても貴重である。

また、画面の中央に楕円形に一定間隔で修補の痕跡があることは、永らく続けられてきた涅槃会本尊として修理を重ねながらも大切にその法会に用いられてきた証しでもあり、制作当時には費用の嵩んだ絹本としたことで、全体的には着色の残存も良く現在まで涅槃会本尊として用いられた続けたものと想像される。

しかしながら、現状みる傷みのほどは、およそ百年から二百年といわれる表具の寿命が尽きて全解体修理の時期を迎えていることを示しているものと思われる。

IIIの最後の略した部分には、細かな図像学上の説明があります。いくつかはこの紙面で、写真とともに紹介しています。

制作年代については、口頭では15世紀後半と言われましたが、文字にする場合は、専門家は確実なことが記さないものです。「戦国時代末から江戸時代のごく初期、・・・およそ寛永年間(1624、44年)を降らないころのもの」という書き方をしているのはそのためでしょう。

### ☆ピンチヒッター

件の涅槃図は、すでに補修に取り掛かっているのに、残念なことに、今回の涅槃会の本尊になってもらうわけにはいきません。本堂に掲げることさえはばかれるほど傷みが激しかったのだと、ご理解下さい。

というわけで今回は、別の涅槃図を本尊とします。こちらは問題の涅槃図に比べると時代は比較的新しいものです。ただ、「八相涅槃図」と呼ばれる特殊なもので、画面の中央に釈迦が横たわったお馴染みの涅槃

釈迦の枕元に袋包みが見えます。この包みは沙羅樹の枝にかかった構図が多いですが、ここでは枕元に置かれています。

左の、玉を持って嘆いている赤い姿は、阿修羅。有名な興福寺のものとはずいぶん雰囲気の違いが違いますね。

釈迦は「目を伏せながらも優しく均整に優れた面相」と「所見」にあります。お顔や口元の傷が痛々しいです。



図の両側に、釈迦の入滅前後の八つの物語の場面が縦に四つずつ配されています。とても珍しいものなので、法要の時はぜひ見逃さないようにして下さい。

▽

△

われらが涅槃図が補修を

終えて帰って来るのは、来春の予定です。

ただ今回実施するのは、現状の傷みがこれ以上ひどくならないための補修です。見違えるようにきれいになって戻ってくるわけではありませんので、そういう期待はしないで下さい。

それにしても、みなさんからお預かりした浄財で、患部の手当てをしたわけです。傷の癒えた涅槃

図を本堂に掲げて、凱旋報告会ができればと思っっています。そのときは文化財研究所のスタッフに、詳しい話をしてもらうつもりです。

▽

△

檀家のみなさんには、涅槃図の補修と、法要執行のための浄財の喜捨をお願いしました。

今回は、世話人さんたちが訪問できなかった家も少なからずあり、残念ながらもまだ目標額には達していません。すでに浄財をお寄せ下さった檀家さんも、そういうことならもうひと頑張り、追加の浄財をお願いできれば、大変ありがたいです。

なお、法要終了後は、お話の時間がもうけてあります。今回は、最近「お笑い福祉士」の活動で注目を浴びている、笑福亭學光さんにお話ししました。

學光さんには、1999年の大法会のイベントで、本堂で落語を二席お願いしました。が、すでに前世紀の話になってしまいました。

お釈迦さんの命日に、寺で落し噺を聞いて、本堂を笑いに包むのも悪くはないでしょうが、今回は、そのお笑い福祉士の活動を中心に、お話をいただけることと存じます。



### ◆休筆報告

昨秋、「百日紅」は、お休みをもらいました。理由のひとつは、私が病に侵されたためです。

昨春の検査で病気が見つかり、入院して患部の切除手術をしました。再発の危険性のある病気です。涅槃図を控えて悩ましいことですが、こればかりはどうしようもありません。不摂生な暮らしをしているわけでもないのですが。

先代住職も、高齢に加えて、やはり病気を抱えていますから、檀家のみなさんには、いろいろご迷惑をおかけする場合もあるかと思えます。ご寛恕下さい。

いまひとつは、記事にすべき話題の枯渇です。

「百日紅」は、鳴門に来てすぐに作りはじめ、四半世紀を越えました。徒に数だけを重ねてきましたが、

書きたいことがなくなってきました。筆を擱く時期が近いのかも知れません。

もう少しだけは頑張ってみるつもりですが、今回が96号。三桁に届くかどうか、微妙なところです。

◆カンパと切手  
徳島市の福井幹代さん、田辺健二さん、木津の米本茂雄さんからカンパ。裾野市の高橋千代子さん美祢市の高田徹明さん、木津野の前田義秋さんから切手が届きました。ありがとうございました。

鳴門市長 緒方 裕信

〒772-0004  
鳴門市撫養町木津 1037-1  
電話 088-686-2450  
ファクス 088-686-2130  
E-Mail  
cho\_kuma@mwb.biglobe.ne.jp  
URL  
http://www.chokokuji.jp/